

招待席

「散文詩」

蝶 愛ずる少年

天津孔雀

鍵のかかった寝室へと おもむろに傾ける望遠鏡  
真つ赤に沈んでいった 太陽の喪に服し  
慎み深く 艶やかな 黒いヴェールにぐるまる世界  
梟（フクロウ）は トネリコの樹の上で寝息をたて  
手折られた薔薇が 枯葉の寝床で滅びを眠る  
たゆたうアネモネ まばゆい闇  
微睡み香る孤高の水仙 眠りへ倒れたヒヤシンス  
秘密めいた囁きを交わしながら 密かな罪に酔い痴れている  
赤く群咲く罌粟の下では 忘れ去られた少年が 不毛な睡眠（うまい）を  
旅している

枝を渡る 夜風が奏でる 微かなチエンバロ  
瞼を閉じない 小鳥が唄う 途切れ途切れの 夜想曲

蝙蝠たちは 暗闇に紛れ 輪郭もおぼろ

夜のむこうへ うっとり 溶けた

月は夜空を纏い ひとやかな衣擦れを耳に残し 柩の中へと帰っていく

起きているのは 悪い子だけ

もう一度 内緒で開いた パンドラの箱から

飛び出し 散らばる 死んだ星

見詰める 僕の右眼から したたる 銀河 左手で 拾い集める 星の影

天体観測 過去へと合わせた 照準器 頬へ尾を曳く 箒星

覗いた レンズの向こう側 映し出される 大きな ベッド

シーツの白が 眩しく 溺れ 肩で ようやく 息をしている

あれは 僕 光を慕い 飛び込んできた 蜉蝣を ジリジリ 焼き殺した 燭の火で

明るむ 待ち 焦がれていた 光は 浮かび上がった 暗黒星

僕が 求め 待ち 焦がれていた 光は 浮かび上がった 暗黒星

大人は みんな どうして 僕に どうして こんな こと するの？

きつと 僧院の 中庭に 住み着いた 狡猾（こずるい）蛇が 司祭を まんまと 喰

（そのか）し

ソドムの 林檎を 食べさせたんだ

震える 星の 蒼褪めた 裸 必死で 許しを 乞う 叫び

容赦なくの しかかり 残らず 貪る 変光星

侵食される 身も 心も

眸に宿した不吉な土星 男は無言で繰り返す

従え 従え 従え

どうしても 見つけられない北極星

脱ぎ捨てた制服のポケットで 壊れてしまったアストロラーベ

元居た場所には戻れない

酷い悲鳴をあげながら 確かに聞いた 天使の喇叭

今に空から 雷（いかずち）が降りだすだろうけど

神様の怒りは 生贄にされた羊の上にも注ぐんだ

だつて清らかな天使の軍隊は 救済の白き馬の背中に

穢れた僕を乗せはしまい

幼い指先 意味も解らずたどった聖書

美しい写本のページから あんなにも警告していたハレー彗星

ランブル兄弟の青に見蕩れて 読み取れなかつた大事な言葉

礼拝堂  
上手い嘘だと知りながら 後ろ手で閉めた重たい扉

ほどけたリボンを結ぶふりして 項へ廻る男の手

彼は果たしてユダだったのか 僕と同じように 神を愛していたのだろう

か  
日曜日のミサを終え 黒い帽子を脱ぐとき

若い神父の身体から立ちのぼる

硝煙と 獣の匂い

マドレーヌには まだ早い  
ラテン語の補習に飽き飽きしたら 怠惰にまかせ気怠い午睡  
深い森 物柔らかな静寂に抱かれた ギムナジウムの夏休み  
僕の生まれるずっと前から 時間を見据える大聖堂  
祈りと学びと きわどい遊び  
指についたブランドーを舂める程度に嗜（たしな）む秘密  
約束された 破られるはずのない安息 細枝揺らしたイシタタキ  
囀るホオジロ ざわめく葉叢  
ここでは何も起こらない  
一学期の授業が終わると みんな一斉に大はしゃぎで各々の母さんのところへ帰って行く  
檜の樹が囲む 古い寄宿舎に取り残されているのは  
僕と 数えるほど 古い寄宿舎に取り残されているのは  
大勢の腕白たちが集まる場所では からかわれて傷つく事も 習わしのよ  
うなものだけども 彼らに聞かない方がいい  
帰る家が無い理由など わざわざ話題に出したりしない  
みんな知っているけど わざわざ話に出したりしない  
子供達だけで重なる日々は 拙い調子のトロイメライ  
罪とは呼べない ほんの少しの禁断を 軽やかに踏み越えて行く 少年達  
温室へ 上級生を訪ねて行く前に そつとひとふり 仄かに垂らした董の  
香水  
首筋への不意な接吻（くちづけ）で 灼熱する 象牙の身体  
あの子が口移しで 僕に飲ませたウイスキー

一人になると呼んでみる 大事な名前

神様 一体 僕が何をしたというのです

糸杉が立ち並ぶ校舎の裏手 振り向く眼路遙かまで塞ぐ 暗い暗い緑色

可愛がっていた鹿を アポロンとの狩猟の際 誤って殺してしま

悲しみのあまり糸杉へと変身した ギリシャ神話のキュパリッソ

キリスト教では 高潔と死の樹として 墓地なら必ず植えてある

僕は一人で森へ入るのが好きだ

日常の喧騒を失い 静まりかえる夏の真昼

図書室から持ち出した分厚い本を抱え しゃがみ込み糸杉の樹へと寄り掛

かる

そうして眼を閉じていると 幼くして死んだ友達の柔らかな手が愛おしそ

うに僕を撫でる

懐かしさと少しの汗で 湿った僕の白い頬

かすめて通る緋緘蝶（ヒオドシチョウ）の 燃えるような羽根の色

筋黒白蝶（すじぐろしろちよう） 黒揚羽（クロアゲハ）

赤星胡麻斑（アカボシゴマダラ） 紋黄蝶（モンキチョウ）

薄青尾長裏波蜆（ウスアオオナガウラナミシジミ）

銀星豹紋（ギンボシヒヨウモン） 星三筋（ホシミスジ）

恋の後の惨劇の 血溜まりに浮かぶ薔薇の赤

横たわるたおやかな死者達の 見開かれた眸の黒

最後に見上げた空の青  
白昼堂々 不穩に光った星の銀  
もつれ合い ハラリとヒラヒラ危うげな  
黙って佇む墓石を縫って  
とりどり飛び交う 墳墓の蝶  
真夏でもヒンヤリ羊歯が呼吸する 日差しもまばらな森の奥では  
吸水にやつて来るのか 無数の蝶が飛んでいる  
金属色の羽根へと宿した 濁りない夏空の 完全な紺碧  
烏揚羽は 遠くで瞬く青い星  
伸ばした指先 触れては零れる 姫白蝶 飛んでいる時キラキラ輝く裏銀蜆  
逢瀬の直前 結んだりボンの赤立羽（アカタテハ）  
薄羽白蝶（ウスバシロチョウ） こそえに散らばる陶絵硝子（ステンドグラス）  
長い尾状突起をなびかせながら 優雅に通り過ぎていく尾長揚羽（オナガアゲハ）  
樹液に集まる瑠璃立羽（ルリリタテハ） 白帯揚羽（シロオビアゲハ） 細  
尾蝶（ホソオチョウ） 棲黒黄蝶（ツマグロキチョウ） 黒日陰  
青筋揚羽（アオスジアゲハ）  
（クロヒカゲ）  
銀一文字セセリ  
立ち上がると みんな何処かへ行ってしまう

日が暮れてから森へ入ることは 学校がうるさく禁じている  
そのせいか 最果てにある 聖職者の館は よけいに謎めいて  
妙な噂が絶えた事は無い  
新しく来た若い神父様は 夜毎 美少年を連れ込んで  
真夜中 ふしだらな御茶会をしているつて 同級生から聞かされたとき  
怖かったけど それとは別に 何だか身体がゾクリとした  
朝の礼拝の最中でも 彼だけは月光を浴びている  
そう思えてしまうほど白く憂わしい神父様は  
福音書へ落とす澄んだ眼で 見知らぬ少年の 薄青い裸を見るのだろうか  
聖餐式に燭台を握る太い指で 眺める身体のどの部分を どんなふうに刺  
激するのかわ  
一方的に責めたてられて少年は 快樂に引き裂かれると どんな声を出す  
のだろうか  
ウィースバーデンへ帰郷していた上級生から レースのハンカチが送られ  
てきたあの日  
僕はいつものように 糸杉の傍での読書を終え  
黒日陰が遠近に舞う中 寄宿舎へ帰ろうとしていた  
猟銃音  
微かな人の気配を感じそばだてていた 耳を打ち抜く乾いた銃声  
ゆつくりと 眼の前を落下する小鳥  
ほどなくして現れた 猟銃を担ぎ鳥打帽の背の高い男  
僕の学校の神父様だ  
ギクリと動けない僕の頭を 皮手袋のまま撫でまわし

片手で指さす 蝶の群れ  
「あれは薄色木間蝶だ 夕方になると飛びまわり 腐った果実に集まる蝶だよ」  
そう言つて動かなくなつた鳥から一番青い羽根を塗り 僕の髪へ飾つた  
神父様は少しかがんで 僕の耳へと低く囁く  
「内緒にしてくれたら 日曜日 君にいいものをあげよう」  
あの時夏の盛りの森で 紫燕が乱れ飛ぶ夕暮  
撃ち落とされて空を奪われ 緑を枕に儂く息をひきとつた あれは僕ではなかつたか

クッキー 注射器 キャラメル 足枷 ラムケーキ  
マカロン フィナンシェ シェリー酒 首輪  
つきつけられた鋭い鋏  
マドレーヌには まだ早い  
礼拝堂 上手い嘘だと知りながら 後ろ手で閉める重たい扉  
ほどけたりポンを結ぶふりして 項へ廻る男の手  
叫ぶ間もない強引な接吻（くちづけ） 逃げもせず されるがままに吸われる舌  
僕は果たしてユダなのか  
手を引かれ森の奥へと向かうとき いつもよりも遠巻きに飛んでいた揚羽蝶  
ヤブガラシの周りで揺れる後ろ翅の オレンジと碧瑠璃（へきるり）の綺



羅星

足音に驚いて 集団で森を出て行く 深山鳥揚羽  
麝香揚羽の雄は 採取されると甘美な匂いを放つという

神父様の太い腕に 捕まえられた僕からは どんな香りがしたんだろう

それは きつと 腐敗していく 葷の匂いだ

ミカエルの天秤が 傾くのが はつきりわかるほど

堆く積もる 嫌な予感

ボケットへ手を入れ ギュツと握りしめていた レースのハンカチ

黄に風ぎわたる 朝の光で 洗われて 金色に 群飛ぶ雀のような

神聖なものらを 慕いつつ どうしようもなく 影兆す 悪へも 惹かれていく

硝煙と 獣の匂いの する彼は 幼い僕には あがないがたい 聖アントワーヌの

誘惑だった

夜 月も 柩へ 引き返し 起きているのは 悪い子だけ

いかな いことだと わかつて いたけど いわれる ままに 脱いだ シャツ

素早い 動作で 入口を 閉めながら 男は 黒く 微笑した

鍵の 付いた 鞆から 細い 注射器が 取り出された 時

僕は もつれる 脚で 逃げようとした

あつ という まに 手首を 掴まれ 強く 何度も 打たれた 頬

ベッドへ 倒れ 込む 僕の 首筋へと あてが われる 冷たい 針

すぐに 身体が 痺れ 苦しい 暗い 喉が 渴き そこだけ 熱を持って 疼きはじ

めた 両脚の間

僕が 誰にも いわない ようにと 男は 啜えて いた 煙草の 火で ヒクつく 胸の 真

ん中を 焼いた

悲鳴を上げた罰だと言つて 背中へつけた酷い傷

絶え間なく振り下ろされる乗馬に使う細い鞭

唾液に濡れた硬い指で 僕の乳首をつねりあげながら

肉欲のままに破る羽根

身体の奥まで貫いた 蜜にまみれてヌラヌラ光る太い針

僕は飛べない片羽根の蝶

ごめんなさいと泣きながら 差し出された男のつま先へ  
何度も 何度も はしたなく僕は接吻（くちづけ）をした

それでも僕は 僕は神様を愛してる

けれども悪夢にさいなまれ ブランデーさえ効かない夜は

神様の その手はあまりに遠いんだ

深い森 物柔らかな静寂に抱かれた ギムナジウムの夏休み

夏蝶たちは何も変わらせず木陰で憩い ヒヤクニチソウの花へと伸ばす細い

口

聖職者の館を見下ろす糸杉は一部始終を見ていたのだろう

うつむく頬へと柔らかない風を送り 僕の涙を乾かそうとする

濃い黄色で一回り大きな夏型の揚羽蝶

すり硝子の羽根が陽光に灰白く透ける 筋黒樺斑（スジグロカバマダラ）

ウイスバーデンから届いた手紙には

何事も無く穏やかに蝶を愛でながら過ごしていると返信しよう

約束された 破られるはずのない安息  
ここでは何も起こらない  
一滴の水も飲めなくなつた片羽根の蝶は 上級生の掌で死んでいくことば  
かり夢見ている  
僕の 唇へ 優しく留る 墳墓の蝶

筋黑白蝶（すじぐろしろちよう） 黒揚羽（クロアゲハ）  
赤星胡麻斑（アカボシゴマダラ） 紋黄蝶（モンキチヨウ）  
薄青尾長裏波蜆（ウスアオオナガウラナミシジミ）  
銀星豹紋（ギンボシヒヨウモン） 星三筋（ホシミスジ）  
揚羽蝶（アゲハチヨウ） 裏銀蜆（ウラギンシジミ） 赤立羽（アカタテハ）  
薄羽白蝶（ウスバシロチヨウ） 黒日陰（クロヒカゲ）  
薄色木間蝶（ウスイロコノマチヨウ） 銀一文字セセリ（ギンイチモンジセセリ）  
青筋揚羽（アオスジアゲハ） 姫白蝶（ヒメシロチヨウ）  
紫燕（ムラサキツバメ） 定山蜆（ジヨウザンシジミ） 緋緘蝶（ヒオドシチヨウ）  
麝香揚羽（ジャコウアゲハ） 瑠璃立羽（ルリタテハ）  
つかまえた